

〈研究ノート〉

## 大学生が考える大学教員の対人魅力

松本 淳子\*

### The Role of Interpersonal Attraction in Students' Evaluations of University Professors

Junko Matsumoto

**要 旨** 筆者は学生相談室において、多くの学生から教員に対するさまざまなコメントを聴く機会がある。そこで果たして学生たちは、身近に接する教員についてどのようなポイントで好悪を判断しているのかを検討することを目的とし、502名の大学生を対象に調査を行った。その結果、データを因子分析したところ、好悪を規定する要因として「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましさ」、そして「力本性」の3次元が導き出された。その中で大学生が最も重視するのは教員の「個人的親しみやすさ」であることがわかった。また自由記述の分析結果からも、同様に「親しみやすさ」が最も多く、つまり気軽に話しかけやすくてフレンドリー、また学生の立場に立って親身に話を聴いてくれて、気遣いのできる教員を望んでいることが示唆された。

キーワード 対人魅力 個人的親しみやすさ 大学教員

#### I はじめに

少子化に伴い、今や「大学全入時代」に突入し、私立大学の定員割れによる経営危機や国立大学の再編・統合など、まさにわが国の大学は大きな転換期を迎えているといっても過言ではない。日本私立学校振興・共済事業団の私学経営相談センターには、大学や短大から経営改善に関する相談が相次ぎ、同事業団によれば、2004年度に入学定員割れになった私立大は533校のうち155校（約29%）、短大は400校のうち164校（約41%）に達する（読売新聞、2005）。そういった危機を脱するべく、より多くの学生獲得にアイデアを絞り、一方ではせっかく入った学生を中途退学させないように大学独自のさまざまな試みや努力がなされている。そんな中、ある大学では、学生が3回続けて授業を休むと教員が携帯電話などに連絡し、その後親身になって話を聴くという支援体制をとっている。休みがちだった学生を呼び戻すことで、在学4年で卒業できた人もいると報告している（朝日新聞、2007）。学生に対して質の高いサービスをしなければならない時代、教員は授業をしているだけではもはや済まされないとこまでできているといえよう。学生にとっ

\* 本学学生相談室カウンセラー

て身近な存在である教員との接点は、これまで以上に増えていくと想像できる。

ところで筆者のところには、学生がさまざまな相談をしにくる。その中には、良かれ悪しかれ教員についてのコメントが混じることが多い。そこで本研究では、果たして大学生は教員に対してどのような要因で好き嫌いを判断しているのかを調査することを目的とした。

他者に対して魅力を感じることを対人魅力 (interpersonal attraction) という。人は、魅力のない他者と行動をともにしなければならないときにはストレスを感じるのに、魅力ある他者と行動をともにするときには、充実感や満足感を感じたりあるいは心が癒されたりする。このように、対人魅力はわれわれの日常生活に深く関わりをもっている (白樫 1997)。

対人魅力の実証的研究は1960年代に始まり、Anderson (1968) などによって、好まれる性格特性が実証された。この好まれる性格特性は同性—異性という次元にかかわらず、教師と生徒といういわばタテの次元でも検討されている。杉村 (1979) は大学生に、小学校から高校まで各段階での好きだった教員と嫌いだった教員を回想し記述させたところ、いずれの段階でも好悪それぞれの教員の特徴はほぼ一致していた。また豊田 (2005) は、大学生が教員の好悪を判断する対人認知の次元のうち、「個人的親しみやすさ」であると報告している。えてして、好かれる教師にかかわられることで、児童・生徒・学生はポジティブな刺激や評価が得られ、おのずと学習・生活面が発展的に促進していくことは明白である。

本研究では豊田 (2005) の研究を追試するかたちで、さらに自由記述を詳しく分析し、好悪にかかわるより強固な要因を同定するために調査を実施した。

## II 研究方法

### 1. 被調査者

P私立大学の大学生310名 (女性) とQ公立大学の大学生192名 (男性36名, 女性156名) の計502名であり、平均年齢は20.3歳 (SD=2.08) であった。

〈調査実施期間〉

2006年12月～2007年2月の間に実施した。

### 2. 使用尺度

林 (1978) の「特性形容詞尺度」を用いて、まず大学生に「好きな教員」ならびに「嫌いな教員」について「積極的な—消極的な」、「心のひろい—心のせまい」、「自信のある—自信のない」など20の形容詞対において、「かなりそう思う (1)」から「かなりそう思わない (5)」までの5段階でそれぞれ評定を求めた (資料1参照)。また最後に自由記述として「大学にこんな先生がいたらいいな、と思う先生はどのような先生ですか」という設問を加えた質問紙を使用した。

資料1. 教員の対人魅力についての質問紙

### 3. 手続き

調査は各大学の講義室で集団的に実施された。その際、おおまかな調査の目的ならびに記入時

資料1 教員の対人魅力に関する質問紙

★男 \_\_\_\_\_ 女 \_\_\_\_\_  
 ★年齢 \_\_\_\_\_ 歳 \_\_\_\_\_

1. あなたの大学の中で、「好きな教員」をまず思い浮かべてください。そしてその教員について、以下の形容詞対がどれくらいあてはまるかを、1～5の中から選んで○をつけてください。

	かなり	やや	どちらとも いえない	やや	かなり	
1 積極的な	1	2	3	4	5	消極的な
2 人のわるい	1	2	3	4	5	人のよい
3 なまいきでない	1	2	3	4	5	なまいきな
4 人なつっこい	1	2	3	4	5	近づきがたい
5 にくらしい	1	2	3	4	5	かわいらしい
6 心のひろい	1	2	3	4	5	心のせまい
7 非社交的な	1	2	3	4	5	社交的な
8 責任感のある	1	2	3	4	5	責任感のない
9 軽率な	1	2	3	4	5	慎重な
10 恥しらずの	1	2	3	4	5	恥ずかしがりの
11 重厚な	1	2	3	4	5	軽薄な
12 沈んだ	1	2	3	4	5	うきうきした
13 堂々とした	1	2	3	4	5	卑屈な
14 感じのわるい	1	2	3	4	5	感じのよい
15 分別のある	1	2	3	4	5	無分別な
16 親しみやすい	1	2	3	4	5	親しみにくい
17 無気力な	1	2	3	4	5	意欲的な
18 自信のない	1	2	3	4	5	自信のある
19 気長な	1	2	3	4	5	短気な
20 不親切な	1	2	3	4	5	親切な

2. 次に、あなたの大学の中で、今度は「きれいな教員」を思い浮かべてください。そしてその教員について、以下の形容詞対がどれくらいあてはまるかを、1～5の中から選んで○をつけてください。

	かなり	やや	どちらとも いえない	やや	かなり	
21 堂々とした	1	2	3	4	5	卑屈な
22 非社交的な	1	2	3	4	5	社交的な
23 分別のある	1	2	3	4	5	無分別な
24 なまいきでない	1	2	3	4	5	なまいきな
25 恥しらずの	1	2	3	4	5	恥ずかしがりの
26 責任感のある	1	2	3	4	5	責任感のない
27 心のひろい	1	2	3	4	5	心のせまい
28 人のわるい	1	2	3	4	5	人のよい
29 無気力な	1	2	3	4	5	意欲的な
30 積極的な	1	2	3	4	5	消極的な
31 親しみやすい	1	2	3	4	5	親しみにくい
32 重厚な	1	2	3	4	5	軽薄な
33 不親切な	1	2	3	4	5	親切な
34 沈んだ	1	2	3	4	5	うきうきした
35 人なつっこい	1	2	3	4	5	近づきがたい
36 気長な	1	2	3	4	5	短気な
37 感じのわるい	1	2	3	4	5	感じのよい
38 にくらしい	1	2	3	4	5	かわいらしい
39 軽率な	1	2	3	4	5	慎重な
40 自信のない	1	2	3	4	5	自信のある

3. 大学にこんな先生がいたらいいな、と思う先生はどのような先生ですか？自由に書いてください。

{ \_\_\_\_\_ }

の注意事項を説明し、その後回収した。

### Ⅲ 結果

#### 1. 信頼性の検討

尺度の等質性ともいわれる内的整合性を検討するため、Spearman-Brown公式によるCronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ信頼性係数は0.74 (M=3.06, SD=2.80) であった。

#### 2. 因子分析

20項目の形容詞対について因子分析（主成分分析・varimax回転）を行った。その結果、3因子が抽出され、“人のわるい—人のよい” “なまいきな—なまいきでない” “人なっっこい—近づきたい” “かわいらしい—にらしい” “心のひろい—心のせまい” “感じのよい—感じのわるい” “親しみやすい—親しみにくい” “気長な—短気な” “親切な—不親切な” の9項目を林（1978）にならって「個人的親しみやすさ」、次に“責任感のある—責任感のない” “慎重な—軽率な” “重厚な—軽薄な” “分別のある—無分別な” の4項目を「社会的望ましさ」、そして“積極的な—消極的な” “社交的な—非社交的な” “恥ずかしがりの—恥しらずの” “うきうきした—沈んだ” “堂々とした—卑屈な” “意欲的な—無気力な” “自信のある—自信のない” の7項目を「力本性」とそれぞれ命名した（表1）。

表1 特性形容詞尺度の因子分析

		1	2	3
個人的親しみやすさ	感じのわるい—感じのよい	.765	.228.	.099
	人のわるい—人のよい	.693	.045	.131
	親しみやすい—親しみにくい	.671	.279	.111
	にらしい—かわいらしい	.649	.094	.047
	気長な—短気な	.640	.094	.161
	不親切な—親切な	.610	.168	.260
	なまいきでない—なまいきな	.569	.230	.135
	心のひろい—心のせまい	.533	.159	.145
	人なっっこい—近づきたい	.501	.210	.335
社会的望ましさ	積極的な—消極的な	.082	.721	.039
	自信のない—自信のある	.034	.703	.206
	無気力な—意欲的な	.253	.663	.193
	堂々とした—卑屈な	.049	.641	.241
	非社交的な—社交的な	.332	.599	.045
	沈んだ—うきうきした	.451	.527	.358
力本性	恥しらずの—恥ずかしがりの	.298	.519	.316
	重厚な—軽薄な	.008	.127	.741
	軽率な—慎重な	.228	.046	.664
	責任感のある—責任感のない	.141	.332	.511
	分別のある—無分別な	.247	.340	.435
固有値		4.186	3.314	2.098
寄与率		20.932	16.571	10.491
$\alpha=0.74$				

表2 3次元の合計点ならびに差得点の平均

次元	性	平均標準偏差	好きな教員	嫌いな教員	差得点
個人的親しみやすさ	男	M	35.31	20.47	14.03
		SD	1.24	1.19	1.79
	女	M	36.85	18.73	18.12
		SD	1.03	1.05	1.56
社会的望ましさ	男	M	14.01	10.72	3.33
		SD	1.12	1.27	1.82
	女	M	14.82	10.76	4.06
		SD	1.07	1.21	1.93
力本性	男	M	25.86	19.83	6.03
		SD	1.13	1.35	1.71
	女	M	26.86	21.57	5.28
		SD	0.99	1.33	1.60

表3 差得点における性・次元の検定

変動因	平方和	自由度	平均平方	F
性	14.467	1	14.467	1.010
次元	648.111	2	324.005	21.391*
性×次元	30.298	2	15.149	5.846**

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

### 3. 因子ごとの平均値の比較

データから得られた「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましさ」そして「力本性」の3因子についての評定値の平均値を「好きな教員」と「嫌いな教員」、また男女別に算出した（表2）。

次に、性（男女）を被験者間要因、評定対象である「好きな教員」、「嫌いな教員」を被験者内要因の2×2の分散分析を各因子ごとに行った。その結果、「個人的親しみやすさ」では好悪の主効果が統計的に有意であり〔 $F(1,500) = 1621.644, p < .001$ 〕、また好悪および性の交互作用が見られた〔 $F(1,500) = 18.832, p < .001$ 〕。そして「社会的望ましさ」ならびに「力本性」の各次元においては、いずれも好悪の主効果が見られた〔「社会的望ましさ」： $F(1,500) = 167.148, p < .001$ 、「力本性」： $F(1,500) = 224.826, p < .001$ 〕。また「力本性」においてのみ性の主効果が統計的に有意であった〔 $F(1,500) = 11.795, p \leq .001$ 〕。

### 4. 好悪の差得点

個々の被調査者内における、ある項目についての好悪の差（以下、差得点とする）を求め表2に表した。次にこの差得点について、性（男女）を被験者間要因、3次元の差得点を被験者内要因とする分散分析を行った。その結果、次元の主効果および性×次元の交互作用がそれぞれ有意になり（表3）、グラフに示した（図1）。また3つの次元のうち最も重要な次元は何かを探るため判別分析を行ったところ、「個人的親しみやすさ」が合計の平均値より高くなったことがわかった（表4）。

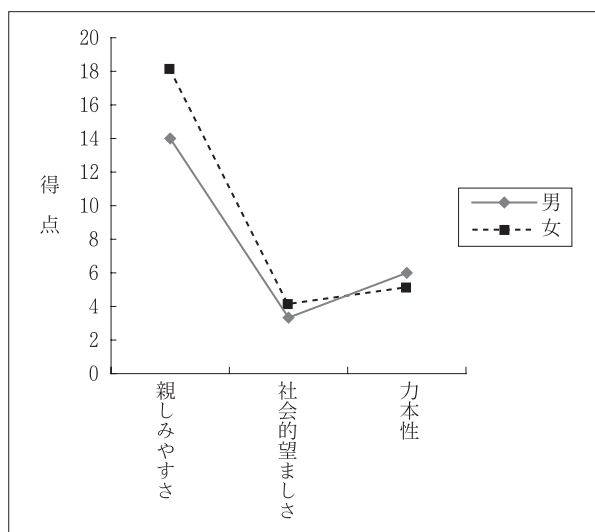


図1 性別による次元ごとの差得点

表4 3次元の差得点における平均値

次元	M	SD
個人的親しみやすさ	2.00	1.58
社会的望ましさ	1.01	1.67
力本性	0.76	1.61
合計	1.37	1.71

表5 自由記述における項目別度数

n=355

項目	度数
親しみやすさ	144
性格特性・外的内的魅力	82
スキル・力量	72
具体的人物	26
その他	11

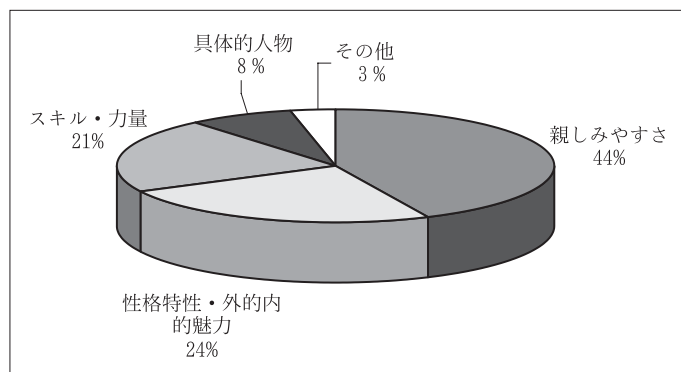


図2 自由記述による対人魅力の分類

## 5. 自由記述の分析

「大学にこんな先生がいたらいいな、と思う先生はどのような先生ですか」という質問に対して318名から複数回答があった。これらをKJ法を用いて分類し5つにカテゴリー化した。さらにそれぞれ「親しみやすさ」「スキル・力量」「性格特性・外的内的魅力」「具体的人物」「その他」と命名し、項目別度数とグラフにそれぞれまとめた(表5, 図2)。その結果、「親しみやすさ」が全体の44%を占め、他の項目を大きく上回った。

## IV 考察

調査を通じて得られた結果をまとめてみると、大学生が教員の好悪を判断する際に最も重視するのは「個人的な親しみやすさ」であるということである。つまり親しみやすさをもつ教員に対

して魅力を感じると言い換えられる。一方、他の2つの次元である「社会的な望ましさ」ならびに「力本性」については、「個人的親しみやすさ」と比較すると、好き嫌いの判断においてそれほど重視していないことが本調査から導き出された。この結果は豊田（2005）の研究と一致するものである。

対人魅力について中村（2003）は、Kretch, Crutchfield & Ballachey (1962) の研究を引用して、対人魅力とはある種の対人態度であると述べている。つまりKretch, Crutchfield & Ballachey (1962) によれば、態度とは3つの成分からなると説明する。それは①認知的成分 (cognitive component), ②感情的成分 (feeling component), ③行為傾向成分 (action tendency component) であり、認知的成分は対象について「好ましいー好ましくない」、「望ましいー望ましくない」、「よいー悪い」といったことから形成される評価的な信念を含む。感情的成分はその対象に対して「好きー嫌い」、「快ー不快」という情動と結びつく。そして行為傾向成分はその対象を「援助するー害を与える」、「報酬を与えるー罰を与える」という意図をもったすべての行動の傾向を示す。本調査で扱った対人魅力の態度成分は、まさしく認知的成分の部分を取り出して検討したといえる。一方、安藤ら（1995）、齊藤ら（1992）は、対人魅力あるいは対人好悪の決定要因は他者要因、自己要因、相互的要因、そして環境的要因の4つに分類している。他者要因とは、例えば美人や整っている顔立ちの対象に対して身体的な魅力や好意をもちやすい (Walster, 1966) というように、対象自身の要因によるものである。これに関してAnderson (1968) はどのような性格特性の人が好まれるかを、性格を表す形容詞を提示して個人的な好みを評定した。それによると、アメリカの大学生に最も好まれる特性は「誠実さ」や「正直さ」であり、次に「知性的」であった。本調査の結果と比較すると差異は明白である。つまりアメリカの大学生は「社会的望ましさ」を重視していることから、わが国との文化や環境の差が影響していると推測される。

ところで今回の調査では、林（1978）の特性形容詞尺度といういわば既存のスケールを使用して予測どおりの結果が得られた。しかし大学生の本音が直接伝わってくるのは、やはり自由記述であり、そこには彼らの思いが散りばめられているのである。そこで355個の“声”に関して考察したい。

まず「親しみやすさ」について大学生は、気軽に話しかけやすくてフレンドリー、また学生の立場に立って親身に話を聴いてくれて、気遣いのできる先生を望んでいる。先の結果においても、好悪を判断するのに最も重視している次元と一致している。これは大学生である彼らが、まさに青年期の発達課題であるアイデンティティの確立に向けて思い悩む時期と重なる。自分とは何かの問いかけと自己の存在証明に対する自分なりの答えを見い出そうするのである (Erikson, E.H, 1977)。

そのとき身近な他者にその思いをぶついたり、あるいは人生の先輩である教員に身内には話しにくいことなどを聴いてもらいたいと思うのではないかと考えられる。

次に多かったのは「性格特性・外的内的魅力」である。これはとかく成人になると純粋さを忘れてしまいがちになるが、大学生は教員に対して何事にも縛られない自由さと子ども心をもったピュアな人、優しくユーモアがあり謙虚で、人間として尊敬できる人を望んでいる。また年齢が

自分と近い人、身体的魅力のある人という記述も多く見られた。これは年齢が自分とそれほど隔たりがなく、彼らが若い人を好むというのは対人魅力を規定する類似性で説明できる (Newcomb, 1960)。

「スキル・力量」では、特に授業のわかりやすさを指摘する記述が多く見られた。これは教育に熱心であること、また決して最良することなく学生一人ひとりに平等に接し、ときには厳しく、賞賛を惜しまない自信に満ちた教員を希求している。このことをMurstein (1972) の外見的魅力のマッチング理論を当てはめて考えてみれば、別の視点からの考察も可能となる。確かに「スキル・力量」に外見的魅力は妥当ではないにせよ、「類似性」というキーワードはここでも応用できうる。つまりMurstein (1972) は、魅力的な人は自信に裏打ちされた見方をしているか、あるいは許容水準を高く設定しているものと考え、一方、魅力的でない人は相手に憧憬はあるものの、自分とは不釣り合いと考えたと述べている (安藤, 大坊, 池田 1995)。換言すれば、前述のような教員を望んでいる大学生は、彼ら自身が高水準をもつ魅力的な人と推測できる。

「具体的人物」では、実際の教員名を挙げていたり、芸能人やドラマの主人公を挙げているものがあつた。すでに自分の身近に存在する教員への魅力の表れと、遠いあるいは架空の存在への同一化とモデルとしての理想があるのではないかと思われる。

そして「その他」には、「現状に満足している (6名)」や「思ったとしてもそうなるはずがない (3名)」が含まれていた。

今まさに全入時代を迎え、今後ますます個々の学生へのきめ細かい対応が迫られることは必至である。その意味でも学生との接点をもつ教員のサポートは、さらに重要不可欠なものとなる。今回の結果から、大学生が求める教員像が示唆された。今後は、対人魅力を規定する環境的要因について検討を加えることを自身の課題としたい。

## 謝辞

この調査にご協力くださった学生のみなさん、ならびに教員の皆さまに心より感謝の意を表します。

## 引用・参考文献

- Anderson, N. H. (1968): *Personality-Trait Words. Journal of Personality and Psychology*, 9, 272-279  
安藤清志・大坊郁夫・池田謙一 (1995): 現代心理学入門社会心理学 岩波書店  
朝日新聞 (2007): 大学 全入時代  
Erikson, E. H・仁科弥生訳 (1977): 幼児期と社会 みすず書房  
林 文俊 (1978): 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) 25, 233-247  
Kretch, D. Crutchfield, R. S., & Ballachey, E. L. (1962): *Individual in society. McGraw-Hill.*  
Murstein, B. I. (1972): *Physical Attractiveness and Marital Choice Journal of Personality and Social Psychology* 22, 8-12  
中村雅彦 (2003): 対人魅力の形成 西日本法規出版  
Newcomb, T. M. (1960): *The Varieties of Interpersonal Attraction. In D. Cartwright & A. Zander (eds), Group Dynamics. (2nd ed.) Row, Paterson.*



- 齊藤勇・高田利武・古屋健・川名好裕・稲松信雄（1992）：対人社会心理学重要研究集2 誠信書房
- 白樫三四郎（1997）：社会心理学への招待 ミネルヴァ書房
- 杉村 健（1979）：教育心理学 近畿大学通信教育部
- 豊田弘司（2005）：大学教授の好意度を規定する対人認知の次元 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 14, 1-4
- 読売新聞（2005）：大学は、いま 第2部 全入時代
- Walster, E, Aronson, V., Abrahams, D. & Rottmann, L.(1966) : *Importance of Physical Attractiveness in Dating Behavior. Journal of Personality and Social Psychology. 4, 508-516*

